歸　郷

　空鼻をりながら、藤屋のは豆洋燈にをって、チャキチャキとを切った。

　ザァッと水を打ち撒ける音、バケツの把っ手が倒れてガランガランと鳴った。それすら妙にあたりに響いた。朝は人の心も心の奧まで靜かである。

　流れる間に流れるのをぎられて、雜巾水を其處だけ黒く通りに凍った。絞られたまゝに未だ湯氣の殘って居る雜巾とバケツを下げて、の延びた番頭は、通りの庭を薄暗い勝手と店の間の暖簾を分けた。ふと大根のらしい味噌汁のにほひが鼻をく。

『おかみ樣、戸矢部さんが中氣になりやしたと！』

容易ならぬといふやうに聲が重い。

『なにや、戸矢部さんが中氣になった……』

『はァ、今、小林さんが寄ってさう云って去ぎやした』

『おやおや、まづ』

勝手元で働いて居たさんは、板の間につっ立って赤くなった手を１巾半の前掛けで拭いて居る。

『どうしっぺ、まづ、可哀いさうになァ』

『なんでも昨日俄に倒れたんだとかって云ひやすけ、手も腰も利かなくなったんだって…』

『うゝむ』

内儀さんは爐傍に膝をついてったをった。

ひの顏になっと赤く灯影がさして、チラチラと小さな炎が瞳に動いた。バケツを風呂場に置いて來て、番頭は圍爐裏の火に足の爪先を炙った。竹筒のれをひつけた煤けた自在鍵に、一升炊きの鍋が肩を曲げて、味噌汁がぐらぐらと煮えくりかへって居る。

『何や……』

ふと小耳に挟んでの老母が口を入れた。佛壇に線香をたてゝ、のを澄まして、暫く手を合せて瞑目して居る。

『戸矢部さんがどうしたって』

は拍手を納めて、煙管を持って、吹き落しのうづ高く盛られた火鉢の前に座った。

『戸矢部さんが中氣になったとい、昨日俄にだって』

『ほゝう、戸矢部さんがな……成る程そらァ困る』

『戸矢部さんが中氣になったや』

　老母は驚いたやうに言葉の尻をあげて、長火鉢のの薄い蒲團の上に座った。

『中氣とは思ひがけなかったな、あんな人がなんのかなァ』

『さうれな、仲間うちでゞも喰はして置くより外あるまいわ。何にしても大變なことになったわい。』

『小林さんがして去ぎやしたっけ、昨日も今日も休業だって……必と何でせう、代り番こに行って世話してやってるんでせう』

『いやみんなもなかなか大がいでねぇわい、第一れなくちゃなァ』

『いさうに』

『一躰戸矢部さんの故郷は何國なんだ』

『茨城、たしかさうだと思ひやしたね、なァになんでも若いうちに家を飛び出したまゝ音信不通になって居て、では生きてるのか死んだものか知らないで居る位なんです』

『こんなことになんなけりゃいゝがと思ってたんだのに、此頃は目もよっぽど惡るくなってたしね、家の前を通り越して八幡町角あたりから引っかへして來ることなどがあったんだもの』

『何にしてもとんだことになったもんだ』

石川町通ひの馬車が、朝の町に浸み込むやうなラッパを吹いて、勢よく驅けて通った。

『お巻、お巻、早くお汁鍋を下してくっりよ、煮つまるかも知れないぞ』

　妹娘は張り切れさうな頬を赤くして、丸々とした手でやがてお膳を運んだ。釜の鍔には吹いたあとの糊がこびりついて居る。味噌の泡が岸によせて干乾びたお汁鍋には蒸氣が騰った。

　高窓の汚れた硝子から、隣の屋根の消え殘った雪が汚く覗いて居る。

　佛壇の線香は燃え盡きようとして、細い煙は花立ての、埃に見える南天の葉の間をさまよった。

　鍋から釜から椀から、白い湯氣がゆらめきって、汁を啜る音が暫く聞こえた。

　　　　　♪　とうんとんとん唐辛子の子―――

　　　　　　　　　七色合せた山椒の子―――の子

　　　　　　　　　　　イエエ―――甘い辛いはお好み次第

　學校へゆく子供の足音が續いた。

　鼠が荒れて居た。時には目の前ですら丸くい背中を鍋の蓋の上に現はして平氣な彼等は、闇には殊更人を恐れなかった。枕許を掠めた思ふと足の上を渡り越して、でもして居るやうに驅け廻る。

『畜生！』と闇に苦笑しながら、すわすわする肩に纏ったものを引き擔ぐと、古毛布はたわいもなく腕にゆするあがって、足袋を逃れたに冷えびえと夜氣がる。られて惜しいものもなければ、それを苦にして叱る必要もない。いとふにはあまりに一人は淋しいやうな氣もした。松葉のるに胡座をかいて、粥を啜る朝から、カタコトと尾の長い奴が現はれて、人を馬鹿にしたやうな恐れるやうな、丸い黒い小さな目から、つて抱いた女の一人の名を思ひ出すやうなこともなくなってからは、彼等の輕い足拍子は、眠られぬ時覺めた時の、たゞ一つの話し對手である。

　ふと覺める。音もない。ぞくぞくする體から、鼻の先の冷たさはまた格別、いてもてもなく闇は續いて居る。風の音―――遠く―――暗い野の遠い果てには黒いが荒れて居る。荒れて狂って寄せて引いて、って續く其の末また遠く、煙のやうな眞っ黒い雲がむくむくと漂ふて居る。―――カタカタと忍びやかに可愛い奴の惡戲、と思った時ははっきりと我にかへって居る。海などゝは思ひも及ばぬ山國の、野でもない小さな町のに、破屋でも九尺二間は闇をって居るのだ。足をくの字にして縮めた體にはが觸れて居り、下には破れ疊が一枚かってある。其下には床がある。それからが地だ。まだまだ上には屋根もある。右の手の方は入り口の障子で、左は壁の崩れた押入れ、頭に向いては大小を張って落ちるのを押へた壁が圍み、足に續いては壁一重隔てゝ仕事師夫婦が二人の子供を挟んで寢て居る。幾時か知らん―――一番鶏がないた。さて今日は幾日だったか―――十五日に保土原を廻ってからなんでも四五日は經った。十二月か、雪が降る雪が積る、る、凍る、えゝ寒い寒い。

　かうして目が冴え切って、仕方なしに起き出して、落葉を燻べて煙草をふかした暁もあった。

　寒氣がしんしんと體にとほった。動けば風がるので、凝乎として居るうちに、下になった手がれ出した。見定めてそれかとほんのり見えるの白むのが待ち遠しい。思ひ出すまい思ひ出すまいと昔を葬るのに苦心したのも今は昔となった。思ひ出たとてそれが今の吾が身に辛くもなければ、たゞもう一日一日の遣り繰りにさへ苦心すれば事足りる身である。過ぎ去ったことやのことを考へるのは贅澤な話しである。起きなければならぬ、喰べなければならぬ、ひに出なければならぬ、そのならぬによって體は操られて居るに過ぎないのだ。

　松葉の殘り少なかったのが少し心細かった。むらむらとく煙りの中に、高目の鐵瓶を下さうとした時、鍵にかけた手がって動かなかった。はてと思ってうむと力を入れた。と同時に千本の手でもって突かれたやうに我にもなく前にのめった。しゅうとたったの中に『った！』と言はうとした口も重かった。大變と思ふ間も遅くりあがらうと焦慮っても焦慮っても腰も足も手も働きを失って、もがけばもがくだけ胸はれるやうに動悸を打った。人を呼びにも口が利けぬ―――觀念して強ひて心を落ち付けた時、鐵瓶の湯がってふすぶすと其處から臭い煙りだけがのぼって居るのを見た。ほうと溜め息をついてあまりの思ひがけなさに暫くとなった。

　ぎしぎしと荷をいで通ったのは同業の小林と云ふ男、

『お早よう！』と外から聲をかけて、

『まだか―――戸矢部さん』と其まゝ行き過ぎようとしたが、ふと呻くやうな叫ぶやうな聲が耳にはいったので、

『したい、は』と荷を下してがらり戸をあけた。

のやうに精一ぱいの聲を絞って、爐の中に黒いものがいた。

『如何した如何した戸矢部さん』男は草鞋のまゝに驅けあがった。

『……………』の手袋をめたまゝの手に抱き起されてすっかり頭巾で包んだ顏を、『大變なことになった！』と言った積りだが、いや自分にもたゞれろれろと聴こえた。

　町にはが二軒あった。一軒を富田屋と云って店の新しい方を藤屋といった。そのぎひから身を起して今のやうな店にした富田屋の方には、子分といふやうながあって、日の町のや、三四里四方のに荷を擔いで賣りに出て居た。の娘に婿が來てから、久しく閉じて置いたをあげた藤屋には馴染もなければまた其頃は品も揃はなかった。しかし若者夫婦が心を合せて精を出した結果は、二三年のうちにちょくちょく卸に運ぶなども二三軒出來、外から入り込んだ行商や富田屋に借を拵へた賣子などが、朝の出掛けや夕方のなどに、店の前に荷を下して不足な品を補って行くやうになった。其頃から藤屋では戸矢部といふ名を知った。一年ばかり富田屋の賣子をして居たとのことであるが、其時は別に一軒を持って、新らしく入り込んだ賣子を二人ばかり、一緒にといふよりは寧ろ使ふやうにして同じ鍋の飯を喰って居た。其二人からちょくちょくといふ言葉を耳にした。白眼勝ちな目、それを厚く蔽ふた瞼の間に深く刻んだ、説き出すやうに言葉は低く靜かだったが、負けるのは嫌ひ、知らないといふのはのやうに、なんでも人の言葉を打ち消した。恐らくまたなんでも知らないといふのはなかった。至るところの風土や習慣もよく語った。確に東京辯で市中のことは見るがやうに語るので、

『東京にお生まれですか』と聞くと、

『いえ生れたのは下谷邊の近在ですが……』と言った。一年と續かず三人はになった。一人は女房を持って土地に居坐り、一人はまた旅から旅と渡って行った。戸矢部はこれも女を引き入れた。の鳥居の前に小さな店を出した。其處で二人女が變った。一生を通じて行末を考へたのはたゞ此一二年の間であった。少しの貯へが出來たところからふと其氣になって、寄るともなく寄りついた島に、身を入れるだけの貝をつくらうとした。併しの廣い空巣に棲み馴れたヤドカリは、自分のをつくる煩はしさにいて來た。氣の利かない醜い女は不明になった。さうなると不思議なもので、喰べさせるものさへ惜しくなって來る。減ったまゝに品物の殖えない棚に、目につく程埃が積って、其時はもう女は居なかった。仲間うちでは一番として居た服装がだんだん汚れて來た。さうして間もなく町のづれのの馬小屋の、脇の小さな小屋に寢起きするやうになった。

　養子問題や何かで富田屋がいて居るうちに、藤屋ではめっきり手を擴げて來た。富田屋の賣子とった者はなくなって、仕入れ元の違ひから、打て一錢二錢のをわけて、大抵兩方へ出入りするやうになった。藤屋で借りをこしらへては富田屋へ行き、富田屋に不義理をしては藤屋へ來る男もあった。

　そろそろ目が惡るくなり出したのは此頃、戸矢部は夕暮れまで一寸方角を迷ふことがあった。梅毒性―――のといふことは自分でも知った。折も折、近年同業者がしく殖えて、勢ひ商ひの高が減って來たので、卸し元に借りをこしらへないのが上乘であった。

　また霜がりて雪がりて木枯が吹いた。一頻り漬け菜の葉が流れた里々の池やに氷が張って壁に掛けたにが横ざまに吹きつける日なぞは、紙笠一枚にホヤ二三本位賣って歸って來る。道順の時には其足で藤屋へ寄った。愛想のいゝさんは、になった赤銅の十能に、焚き落しを山のやうに盛って火鉢にあけてくれる。小僧の揃へる笠三四枚やホヤの位を、店先に下した荷にひ付けて、乏しい縞の財布から小錢を掴み出し、それを火鉢の脇に、指先でさすり分けながら並べたてる、時には小僧に白銅か廿錢銀貨かを見分けて貰ふことがあった。一日一日と目の惡るくなって來るのがわかった。飽かず火鉢にして居る手に、鼠の喰ったやうな手袋がまって、掌や指の先が赤く覗いて居る。十二月だのにまだせらしい、と思っては、取って置いたの着古しや、襟巻の古いのなんぞを恵ぐんでやった。譯のわかった女、話の面白い人と思って居るので、藤屋のにかうされるのだけは喜んだ。たゞ店の小僧や、仲間の者なぞに、少しでも馬鹿にしたやうな口を利かれると、顏色を惡るくして怒ったものだ。

『今晩は』とりをあけて首が出る。照りかへしや硝子器の反射を集めて、宵から閉じ切った店に滿ちて居た光りが、ぱっと重い瞼を射た。

『よいお晩！』と交った聲が應じる。

　パチパチパチと算盤の球が響いた。來る年の大小を刷るために、繪刷物の見本をひらいて、あれのこれのとをして居た番頭の間に割り込んで、燒け爛れた鐵火鉢の縁からてて手を放す。仕入れの用はそっちけに、かうしていつもゆっくりと構へ込んで、ひをやって居る夫婦が、時々合槌を打ったり話し掛けたりするのを對手に、それを樂しみにいろいろな昔を物語った。若い時に服役した工兵の作業演習の時の地雷火敷設、大隊長の目にとまって褒状を貰ったことや、その時の怪我の跡だといって額の傷を見せた。此道にまだ經驗の淺い夫婦に、ホヤ製造所の内部の話もして聞かせた。會津地方を筆屋をして歩いて居た時に、或る田舎の警部と商ひの上から喧嘩をして拘留され、の結果、欠席裁判一年半の宣告を受けた時の話は、恰度壯士劇でも見るやうに人々の手を握らせた。牢獄の中のことも面白く委しく物語った。『人の見ることの出來ない處まで見て來ました。いゝ經驗です』と笑って、自分も其夜は自分の話に醉って歸って行った。驅け出した餘勢が停止ることが出來ないやうに、其折は西の國の港に隱れて居て、毎日の新聞で事情を知り乍ら、つひに日清事件の豫備の招集に應じなかったので。

　どうかしてでも前の借に金を入れた時などは、内儀は錢櫃をがｒがらいはせて、ポストの脇の今川燒なぞを奢った。小僧の居眠りを叱る聲に氣がついて、やうやう品を穴のあいた麻風呂敷に包んで歸って行く。火氣に馴れた顏に、耳を切るやうな風は鋭く刺した、ところどころのを占めて居る今川燒きのをぼんやりと眺めて暗い路地から暗い小屋に這入り、手探りにを擦ってそのまゝ冷たい床に潜り込む。サカサカと藁を踏んで、隣りの馬は時々戸板を蹴った。

　茨城縣猿島郡クヅカケ村戸矢部長太、じてこれだけ聞き得た。引きつられるやうな口を廻していろいろといふのを判斷するのはなかなか容易でなかった。澤田といふ、ぎ商ひをしながら小さな店を盛って居る男が、早速矢立てを抜いて手紙を書いた。今までの生活状態から發病當時のこと行商連中が毎日一人づつ交代で看護をして居ることも書き添へて、それに行商連五人の名をづらりと書いた。クヅカケ村のがしてもわからなかったので、表書にも假名で書いた。永年放浪して居たことゝて、兄か親か其宛名の人の生死もない話だといふ者があって、受取人がなかった時にはかに戻って來るやうにとそれを書留にした。

　これ等の人達の中には、元も子もなくただ其日其日の賣り揚げによって喰って行くといふやうな人もあったので、一日を休んで猶其上一人の扶養をたうとするのはなかなか苦しいことであった。總代をたてゝ願って來たので、富田屋でも藤屋でも快く幾分かを補助してやった。かうしてばかり經ったけれども、クヅカケ村からは何の音沙汰もなく、しやと思った人も來ず、書留もまた戻って來なかった。連中はまた集った。手紙の戻って來ないのを見ると、兎に角家は其處にあるに違ひないといふことになって、若しそれでも反響がなかったならば、その時は役場に願ひ出るなりどうなりとて、して電報を打った。電文に就いてもまちまちな説が出たが、遂に「キトクムカヘニコイ」となった。

　中一日置いて返信が届いた。そらとばかりまだ糊のない印紙を切って見ると、

「ユカレヌシンデモカマハヌ」

　人々は顏を見合した。三たび連中は澤田の家に會議を開いた。快復の見込みのないものを、いつまでもかうして置いては唯一人の爲めに多人數が干上らなければならぬ。返信が打てる位ならば滿更喰ふに困るやうな生活でもあるまい。戸矢部さんは讀み書きも可なりに出來たのを見ても、家は相當に暮して居るに違ひない、かう人々は思って「シンデモカマハヌ」といふ無慈悲な言葉も、家を飛び出したまゝ十數年間といふもの、どんな事情があったにしろ、一度の音信もしなかったことに對して、當然の仕打ちとは思はないまでも、さして苛酷であるとは思はなかった。送りつけられたなら籍のあるものを、まさか受け取らないといふやうなことはあるまい、その時には警察もある。かう理をたてゝ送りつけることに相談が決った。

『喜びなんしょ戸矢部さん、茨城から電報が來たぞい、かうだ、ユカレヌツレテコイっていふんだ―――ないまァも安心しなんしょ』

元氣な聲で小林といふ男があがって來た。彼は殊更にいで見せた。歸るのは厭だと駄々をこねやしないかと、人々はそればかり氣遣ったのだが、たゞ利かぬ手を内懐にしたまゝ首を襟に埋めて黙然として居た。涙が一つほろりと膝にみたのを小林は見て居た。自分達の謀計を見抜いて居るのではないかとも思はれたが、兎に角大人しく云ふことを聞いたのを幸ひにして、其夜から二人づつ爐に火を燃やして番をした。若しや舌でも噛み切られてはと思ったからで。

　藤屋の内儀と妹娘とは、お高祖頭巾と肩掛けにくるまって外に出た。二三日雪のないかはりが吹き續いて、枯れたやうな空氣に下駄の音が高く響いた。閉ぢ籠った夜の街に眠ったいやうな電柱が並んで、ところどころの軒下に荷車が淋しく横かって居る。きそばの提燈、七福パン屋の、の燒ける匂ひが鼻をうった。そこの前だけのさして居る硝子戸の菓子店へ寄って、二人は少しばかりブッキリ飴を買った。

『此處だ此處だ　必と』と娘は先にたって溝板をがたつかせた。二三軒先の鍛冶屋に鐵槌の音がして、火花が時々闇に散って居る。家と家の間の暗い間隙を荒土の壁に傳はって進むと、畑らしい空地に三棟の長家の灯影が見える。

『此處だ此處だ』足場の惡るい石ころ道を躓きながら來て、端の家に聞き馴れた話し聲を聞いた。

『今晩は』

の火に胡座をかいて居た三人の男は急いでを直した。

『やっ　これはようこそ』

娘は提灯を消しは消したものゝ、下駄の散らかって居る庭に足を踏み入れたまゝ暫く上るのを躊躇った。

『はゝゝ　まァおあんがんなんしょっていっても此通りだからなんだけれど、兎に角まァあがっておくんなんしょ』

の敷かってないところにはが見え、床の上では新聞紙の屑や板切れなぞが散って居る。炭俵が一俵と手桶が一つ、隅の方に疊が一疊あって、其上に座って居る戸矢部の脇に汚い長火鉢が見えるだけ、るでがらくたを片づけた小屋のやうだと思った。爐の火だけはに起こって居る。實際それでなくてはやり切れないからで、を通しての下から風がすわすわする。馬小屋が夏のに潰れてから、笑って語った馬の同居から、屋賃の出る此長屋にうつったのだが、これでも家かと思はれる程んで居る。

『オゝ　寒い寒い耳が切れさうだ』といひ乍らまた一人這入って來た。

『や　お内儀さん』とあがらうとするのを一人が、

『どうしたさん、あの澤田さんは』

『うん隣りに居る。呼んでっか』

『いゝや此處でも聞こえるだろ、おう、澤田さん―――』

『おう―――』

『なに此隣家の人がね　お内儀さん、今まで仲善く暮して居たんだから、お名殘りに俺が送って行ってやるといふんでね、恰度いゝ幸ひだと思ってさうすることに決めやした。ほんとなら我々が一人随いていけばいゝんだけれど、何を申すにも御存じの通り我々だって稼なけりゃあ喰えない身分なんだし……また……』

『いやさうですともい、これだけ届かせるのだってなかなか貴方、容易なことでないんだから………そこは貴方その位のことは戸矢部さんにだって不性して貰はなけりゃならないわい』

『は、まァそれで見知らぬ人に頼むよりはと思ひやしてね、何しろのことを見届けて貰はなけりゃなりやせんからね』

『なんだ油がなくなったんでねぇか、不景氣な洋燈だなァ』

　澤田が這入って來た。

『おゝ　お内儀さん　お寒いのによく……なんともまだお禮にもあがりやせんで……どうもはとんだ御厄介をかけまして相澄みやせん、お蔭樣でどうかかうか片がついて、今晩いよいよせることになりやしたから……』

『いや皆樣もなかなかお骨折でしたねぇ』

『戸矢部さんもいくらか名殘りが惜しごせう、聞いてみたら十二年になるっていひやすからね』

　ぽっちりとして居た二分心の洋燈が、吸い込まれるやうにうっすらと暗くなって來る。ほっ、ほっと瞬いた。

『油がねんだ油がねんだ』と澤田は振ってみて、

『困ったな、買って來なくちゃなんね、錢はすっかりあれに入れっちまったしと……貴方一寸先刻の財布を……』と戸矢部の懐に手を入れようとするのを

『あ、いゝかい、こゝから出しときなんしょ、一合だい、二錢あったら澤山だっぱい』と内儀は財布から銅貨を掴み出した。

『さうですけ、すみやせんね何だだって……それぢゃあ……私も財布を置いて來てしまったんだから』

『すみませんね、どら、俺が一つ行ってっか、此處らで石油を賣ってるのは何家だ』と一人の男が起った。

『さうだな、あ　さうださうだ　あの婆さまで賣ってらァ』

『よしきた！』男は洋燈を其まゝ下げて身輕に出て行った。

『あの婆ァさまってば先刻、いよいよ今夜お別れかいってもう泣いてるんだ』

『戸矢部さんも此間まで水を汲んでやったり何かしてそりァ仲がよかったんだぜ、二人とも風變り者だから氣性が合ってたんだなァ』

　爐傍を動かない二人は小聲にこんなことを話し出した。

『これはね、家のの下つ着だったんだけれど、寒さぎにと思ってない、なァに随分極くなったんだけれどそれでも下さ着ればわからないから……それからこれは少しばかりだげっと錢別のお印ばかり、何か喰べたいものでも買っておくんなんしょ、それからこれはお巻が汽車の中でゞも喰べるやうにって買って來たんだから……』と内儀は風呂敷を開いて並べたてた。

『お内儀さま、さう度々して頂いては恐れ入りやす、のこってさへお氣の毒に思ってんですのに……』

『いゝえ、なことは出來ないんだから……それから今夜お名殘りに五郎をの停車場まで送らせるから、あそこを通る時に一寸外から聲をかけておくんなんしょ』

　戸矢部は始終うつむいて居たが、目をしばただいて何やらそろそろ云った。の貸しが一圓小ばしあるのを、拂ひもしずに其上種々貰っては、と云ふものらしいと見て取って、

『なんの貴方そんなことは……』と内儀は言ひ消した。

　澤田は留めるのを聞かず財布から紙綴の帳面を出して錢別の高を書き入れた。帳面には戸矢部千治病氣歸国に付寄附帳と金釘流に書かれて居る脇に年月日と國の名町の名を書いて洋燈行商連中としてあった。

『何も無いやうでもそれでも質屋に拂ったのが二圓と三十八錢ばかりになりやした。それから洋燈の品が少しばかりあったのはが引き受けることにして、そのが三圓二十五錢、富田屋さんからの御錢別として金五十錢、外に古シャツ一枚と足袋一足、一圓がの分として、五十錢が小林春吉、同じく和田瀧太郎、三十錢が齋藤貞藏、同じく三十錢也他伊勢藤次郎、二十錢が佐野與一、これは近所に居るさんです、十五錢と手拭一本坂本おせきさん、これはののおばあさんで……えゝとがめて九圓と八錢也とかうですな、そのうち汽車賃二人分が三圓五十錢として、途中雜費旁一泊……どうしても一泊はしなけりゃなりやせんからな、えゝ一泊費要旁途中雜費が三圓と充分に見積りやした、それにの手當として……友達に送って行ってくれるといふんですけれど、まァ相當な日傭二日分の七十錢をやることに決めて、差引二圓足らずがまあ戸矢部さんの懷に殘る勘定になりやす。お内儀樣まあこれで差支ありやすまいね』

『いや皆樣のお骨折で戸矢部さんも無事に歸られやすわい、御縁があったらまた會ひやすべ、それぢやァ　戸矢部さん　お體を大切にしてまた壯健になってこっちの方へおいんなんしょ』

『さうださうだ壯健になってまた來て貰はなくっちゃなんね、なァ戸矢部さん』と一人が景氣をつけた。

『九時二十分發ですね、そんじゃらそん時一寸言葉をかけてくれるように………五郎と磯に仕度をさせて置くから、ぢやァまァ　皆樣よろしくおの申しやす、戸矢部さんそんぢゃら―――』

　さっと勢ひ込んで來た風に、入れたばかりの提灯の火をとられた、深い暗碧の空に、星が碎けて散れて居る。

　の老婆は戸口まで出て車の影を見送った。

　風呂敷に包んだをみに置いて、膝の上には細かなものを纏めた風呂敷包みを乘せた。

　同業者五人にさんも交じって、富田屋の養子と藤屋の若い者二人の都合九人は、にや何かをかぶって町端れの停車場に向った。

底本：「水野仙子全集」第二巻

初出：「女子文壇」明治四十三年二月

テキスト入力：小林　徹

公開：平成二十九年六月十三日

リンク：[水野仙子ホームページ](http://carlschuricht.com/Senko/senko.htm)